
方紅魔郷 ~ the Embodiment of Scarlet Devil.を弄ってみた

紅魔館雑務総括

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方紅魔郷〜the Embodiment of Scarlet Devil.を弄ってみた

【Nコード】

N5643E

【作者名】

紅魔館雑務総括

【あらすじ】

紅魔郷をオリキャラを組み込んでシナリオを書き替えてみたのです。・・・もとは男のつもりだったのですが、さすがに幻想郷に男は不要だと思ったので、女にしました。・・・序章は一部書き換えただけなので、いろいろ変なところがあったら感想にてご連絡を。

序章：霧の中の宴 Banquet in misty. (前書き)

・・・紅魔郷がわかれば結構です。

キャラ設定

<http://www.geocities.jp/slalslayuji/orichara.txt>

え？ああ、これもどこか変でしたら連絡ください

序章：霧の中の宴 Banquet in misty .

博麗神社の、縁側で。

「相変わらず、酷い霧」

「仕方ないのではないか？そういう季節なのだ」

「でも、こつも霧が深くちやお布団も外で干せないじゃないの」

「確かに、零も言っていた。・・・こんな状態でも、奴らは宴会しに来るのだろつな」

博麗神社。

「幻想郷」の結界からほんの数尺離れた所にある、幻想郷を管理する『博麗』の名を持つものの住まいとなる、何の神を奉っているかわからない神社。ちなみに誰も参拝に來ない。賽銭もない。

なぜなら、平然と妖怪や魔法使いが現れ、宴会をたまに開くからである。

さらに道中、地上も空も神社に行くまでは妖怪で溢れている。

確かにそんな神社に賽銭を入れるような参拝者は『人間の里』にはいない。

そんなことする奴は余程の馬鹿か余程の強者である。

現在、『博麗』の名を持つものは年端もいかぬ14の少女、『博麗 霊夢』。

趣味、なし。

特技、昼寝。

友が二人。

その他知り合い、大勢（一方的に好かれているもの多数）。

そんな寂しい彼女にも、ほんの少し寂しさを紛らわせるものがあつた。

たまに誰かの気まぐれで開かれる宴会である。・・・気まぐれのほとんどは旧知の親友、霧雨 魔理沙であるが。

縁側でもう一人の友、御影 遥と緑茶で和んでいる。

遥は霊夢にとって師匠や育て親のような感じで、彼女が6歳のときから霊力の操作の鍛錬を行っていた。

そのほかに料理、掃除、洗濯の訓練などのおかげで一人で暮らすことも慣れている。

ただ、妹離れできない姉のように、遥が「霊夢が心配だ」といつて頻繁に訪問しているので、霊夢は「あら、また来たの？今日は何の用？」と微妙な表情。

遥は現在、神社裏の森を抜けた先の湖のほとりにある巨大な屋敷でメイド長の補佐的な役割を果たしている。

・・・見た目は、13、4の蒼眼、やや目の端にかかる場所に青い髪少女。ただ、口調に一癖あるせいか、言葉に常人にはない重みがある。

今日も魔理沙の気まぐれで宴会が開かれるようである。

「この霧だ。何人集まるか楽しみだな？」

「ほとんど来ないわよ。来てあんたら三人と魔理沙と・・・あと霖之助さんくらいね。」

「それ以外に親しい仲のものもあるまい。良ければ紅魔館の連中も誘おうか？」

「・・・どうせ屋敷でお高くとまった人たちばかりなんでしょ？じゃあいいわよ、呼ばなくて」

茶請けに煎餅と和菓子をつまみつつ、霧でほとんど見えない外を眺めていた。

そのとき、

「わ、わ、わあ つ！どけどけ つ！」

箒から無数の星型の光を放ちながら、黒衣の少女は現れた。このまま直行すれば霊夢に命中する。

危機感を感じた遥は、懷からアミュレットを取り出し、「それ」の軌道を真横にずらした。

「それ」は変わった軌道についていけず、箒からずり落ち、
「わ、あぐう」

力の供給源を失った筈は失速、落下して地面に突き刺さる。

「・・・毎度毎度、私が遥と日和つてるところに、水を差しに来るのね」

「お、おう。なんせこの霧だからな。目の前が見えないんだ」

彼女の名は霧雨 魔理沙。自他共に認める「普通の魔法使い」。

人間の里の両親のところから家出して（勘当されて）、魔法の森に住居を構え、研究に没頭している。

彼女にも古くからの友があり、神社で霊夢というか自宅でその友人と魔法の研究。

一緒に寝泊りなどもしているらしい。家事のほとんどはその友が担当。

「私が軌道をずらさなければ、霊夢に直撃して神社の中突っ込むところだったのだぞ」

遥と霊夢が魔理沙を攻め立てているところで。

「お い！魔 理 沙 つ！」

遥によく似た声が、霧の中でこだまする。

「お、来た来た」

霧から現れた人物は、魔理沙や霊夢と背が近い。宙に浮いている。遥に顔つきや身長が似た、しかし遥の青いところが錆びたような紅になっている、視線の強い黒基調の紅い魔法陣を模した模様の書きこまれた地味な形の鎧のポニーテールの少女。

ちなみに遥は、黒く長い、銀の装飾が為されたコートを着ている。「スピードの出しすぎだ。筈の制御の仕方、忘れたのか？」

この少年が、魔理沙とともに暮らす霧雨邸家事担当、御影 漆。幻想郷最強の「御影三人衆」の一人、人呼んで『錆紅の破壊神』。

（この追加設定、なくても読めます）

ちなみに遥は『蒼碧の魔術師』と言われている。

「そんなわけないだろ？・・・しかし最近、魔力が制御してる量より多く放出されてる気もするぜ」

「・・・確かに、そんな傾向もあるかもしれねえな」

「この霧、なんかの原因になってるかも。遙、わかんない？」

「うむ・・・私にも、さすがにこればかりは。漆、何かわかるか？」

「霧・・・か。感覚鈍化の象徴のひとつ、だな。無意識の内に自己暗示にかかっているんじゃないか？」

全員が縁側で訝しげに霧を見る。

そして、神社の中を眺めていると、

「霧って、建物の中には入ってこないよな」

「たしかにね。まあ、そういうものかもしれないわね」

「家の中まで霧があると困るから、霊夢の結界の力が無意識で働いてるんじゃないのか？」

「家の中に霧があると・・・確かに湿っぽいし、困るといえば困るわね」

「・・・宴会まで、そう時間がないな。霊夢、準備を始めるぞ。漆、魔理沙、手伝え。」

「おう！任せとけ！」

「零が来るまでに終わらせとくか・・・どうせ弾幕ごっこでぐしゃぐしゃだろ」

「魔理沙、あんたの家でやったらどうなの？まったく・・・」

一刻と少しの時間が過ぎ、ちょうど宴会の準備が終わったところで空からふわりと、紳士服を着崩したような、漆や遙によく似た黒目黒髪の後ろで髪を纏めた短髪の少女が舞い降りた。

「どうも、そろそろ皆集まる頃かと思ひまして・・・」

「あら、零。今日はすいふんと質素な格好じゃないの」

「遅いぜ。全く・・・待ちくたびれただろうが」

いうまでもなく、『御影三人衆』の最後の一人、『御影 零』。人呼んで、『紅魔の雑用』。

遙の働く屋敷で主人の妹の世話、そして紅魔館の諸雑務を一手に受け持っている。

と言う事で、零の役職は「紅魔館雑務総括および館内清掃責任者」

となっている。

ついでに言うと、主人とその妹は、吸血鬼。

零は、吸血鬼に血を吸われても吸血鬼にならない、そして吸血鬼にとつて彼の血が美味である。故に彼は、紅魔館で主人達の食餌しょくじとなっている。

零自身、既に被吸血にある程度依存している状態なので、特に問題視されていない。

吸血という行為には、零と紅魔館の主人の場合、どちらにも過度の程度の快感をもたらすものである。そのせいで、一度騒動が起ったこともあったらしい。・・・解決されたが。

「今日も、フラン様がこの前の新しいスペルを試してきて。めっちゃ危なかったですよ」

「嘘つくんじゃないよ。30%も出してなかったくせに」

「む・・・しかしフランドールは、我々の知る中で最も強いぞ?」

「まあ、45%は出してたよ?」

「半分・・・。どれだけお前ら、強いんだよ・・・。」

「比べるだけ無駄よ、魔理沙。この子達は別次元だから。」

「じゃあ、私と漆が遊んでいるときも10%出してなかったのか?」

「え・・・? いや、40%は出してたぞ。だから圧勝なんだが」

「上達のためには手心も必要なのだぞ、漆。私は霊夢に、しっかり手加減をしている」

「そしてついでに言うと上達には私の才能もあるのよ」

「ちよつと待て、あと一人足りなくないか?」

「え? ああ。霖之助さんですか。あの人、今日は来られないって、屋敷に連絡がありましたよ?」

「あ、そ。じゃあ、中にいこうぜ」

「まあ、霖之助さんは霧とか湿ってるの嫌いだし。」

霊夢の友人、森近 霖之助の営む魔具店「香霖堂」と零や遥の住む屋敷をつなぐ連絡法・・・それは、零が「山で知り合った」と言っていた妖怪と作った電話機。

幻想郷でもっとも科学が発展している『妖怪の山』、そして零の魔法の知識によって出来上がった電話機は、霖之助が頼んで取り付けたもの。ちなみに電気の代わりに幻想郷の中心にある『竜脈』からあふれ出る魔力、霊力、妖力が使用された。

博麗神社は、遥が五分毎に電話をすることが考えられたので却下。霧雨邸は、魔理沙が「神社につけないならいらないぜ」と却下。結局、香霖堂と屋敷にのみ、電話機が取り付けられた。

「そうそう、この日のために新しいお酒を知り合いに頼んで持ってきてもらっただけさ」

零が肩にかけていた鞆から緑色の酒瓶を取り出そうとすると、

「寄越しなさい。全部私が飲むから」

霊夢が肩をつかみ、

「ちよっ……！まで、私が全部いただくんだぜ！」

魔理沙が酒瓶を握り、

「だまれ。……オレが貰う」

漆が鞆の帯を掴む。

「みんなで飲もうと持ってきたのに……」

「好きにしる。私は持参した大吟醸を飲む」

遥は透明の瓶を黒衣の袖（にある謎の空間）から抜き取る。

「ま、迷うわね……」

「どっちにしても独り占めにする気か。オレもそうだが」

「じゃあ私は遥と大吟醸を分けることにするぜ」

「……霊夢。私がこの酒を注いでしてやるから魔理沙を何とかしてくれ」

「魔理沙く、香霖堂から烏天狗便で日本酒がきたぞ。お前にだつてよ！」

「お、届いたか。漆、飲もうぜ！」

漆が白く濁った酒をちやぶちやぶと振っている。

魔理沙がそれに駆け寄り、濁酒に手を伸ばしている。

「……自己完結？まあ良いわよ。遥、肴くらい自分で用意しなさい」

いよ。」

「まったく。仕方ないな・・・」

「あ、じゃあ私も手伝わせて」

遥と零がメニユーについて話しつつ、台所に向かう。

「さて、開けるぜ・・・！」

「どんな味だろうな。楽しみだ」

湊と魔理沙は、壁際で並んで濁酒を開けた。

「っ・・・すごい、な・・・匂いからキツそうだな・・・36度はあるんじゃないか？」

「この匂いのよさがわからないようじゃ濁酒は飲めんな」

「な、何を・・・！」

「ていうかあんた等、外で飲みなさい。私、濁り酒嫌いだから」

「ああ、すまなかった。魔理沙、行くぞ」

「お、おう」

湊と魔理沙は、並んで縁側に向かう。

霊夢は、一人の感覚が嫌いではない。むしろ好きなほうだ。

かといって、誰かと騒いだりするのもし嫌いというわけではない。

遥の大吟醸を、勝手にちびちびと口につけ始めた。

「・・・こうして一人でいいお酒を飲むのも、悪くはないわね・・・」

「私のだな」

「・・・！ びっくりしたあ。ちよつと、急に出てこないでよ」

「いや、霊夢は何をつまみに欲しいかと思ってな」

「私は・・・鶏皮をあげた奴。前、遥が作ってくれたでしょ？」

「ああ、あれか。わかった・・・湊と魔理沙には、あまり必要なさそうだな」

「そうね・・・奈良漬でもあげたら？」

「なおさら酔わせる気か」

「面白くなりそうじゃない？あの二人の関係・・・知ってるでしょ

？」

「まあな。確かに面白くはなるが、後々の処理が大変だ」

「確かに。じゃあ、適当に秋刀魚でも焼いてあげたら？」

「それがいい。じゃあ、私は台所に戻る」

遙は、再び台所へと向かう。

「この霧、夜になると晴れるわね・・・」

そうして思い思いに晩酌を楽しみ、夜は更けていった

宴会の後、時刻は朝の申さるの二つ（9時半程度）。

「じゃあ、私はこれで失礼します」

「悪いわね、掃除までして貰っちゃって。仕事があるのに」

「いえいえ。こちらこそ、準備の手伝いも出来なくてすみません」

「そこまでしてもらうと何だか罪悪感覚えちゃうから遠慮しとくわ」

「そうですか・・・それでは、また今度」

皆は飲むだけ飲み、勝手に帰ったが、零だけは霊夢の掃除を手伝った。

零は屋敷でも清掃の腕で一目置かれている。故に、零の手伝う掃除は迅速かつ完璧に仕上がるわけだ。

「じゃあ、次の宴会が決まったら霖之助さん経由で連絡するわ」

「はい」

ふわりと宙に浮き、零はそのまま物凄い速度で飛翔した。
あっという間に見えなくなる。

「さて、お茶でも飲みますか・・・」

「咲夜・・・」

暗闇の中、紅く、妖しく光る目。

持ち主は、幼い少女。

「は・・・」

銀の髪、冷たい声。

持ち主は、跪く従者。

「『あの計画』、進行状況は？」

「はい。問題なく進んでおります。予定では、明日の明朝には完遂かと」

「そう・・・やっと、一日中自由に回れるわね・・・」

その日の夕方、陽も落ちかけた幻想的な黄昏時。

「・・・っ?!」

零の仕える屋敷、その主人と給仕長の話を、零は聞いた。

「・・・湿っぽいのは嫌いだけど、仕方ないわよね・・・霧しか、今の私達に、太陽を遮る方法はないんだから」

「お嬢様が、それを望むのでしたら」

《・・・霧は、お嬢様の・・・仕業・・・?》

気配を消す術を使っているのではある事はないのだが、つい息を殺してしまう。

《何とかして・・・神社に伝えないとっ!》

走り出そうとした、そのとき。

「・・・聞いたな」

「よ、遥!いま、給仕長とお嬢様が・・・」

「知っている。だから、我々に何が出来る?・・・我々は、この屋敷に勤める身。従うしか、手段はない」

「・・・捕らえる、つもり?私を」

「ああ。仕方ないのだ。お前はほうっておくと、魔理沙や霊夢に、言いかねないからな」

「言うよ。私達に何も出来なくても、魔理沙さんたちを少々サポ―トするくらいは出来る」

「・・・無駄だ」

遥は壁を蹴り、零の背後にまわり、即座に両腕を極める。

反応しきれなかった零は「ぐう」と地に伏せられた。

「あら、零・・・まさか、今の話を異変解決家に垂れ流そうって考えてたでしょ?」

「お嬢様・・・何故、霧なんて・・・」

「聞いてたんじゃないの？ 私たち吸血鬼は、彼方の様な半端な吸血鬼のように日照りの中でも大丈夫なわけじゃないのよ」

「く・・・」

「霧が、私の大嫌いな晴れという天気を無くしてくれるのよ・・・」
「どうする？ 地下の・・・『奴』の部屋にでも押し込んでおこうか？」

「じゃあ・・・私の書斎に嚴重に結界を張って頂戴。私が、監禁しておくから」

「全く・・・少食というのは嘘ではないか？」

「嘘じゃないわよ・・・でも、こんなに可愛い零を・・・私の吸血の虜にしてあげるのも、一興でしょ・・・？」

零の頬を白い手で撫でつつ、紅い目の少女は半ば恍惚の顔を浮かべて呟いた。

「サデリストか・・・」

零は腕を極められた痛みで顔を少し顰め、だが指先で霧雨邸と博麗神社、二つの場所に魔法を送る。

（気づいて・・・魔理沙さん・・・霊夢さん・・・！）

博麗神社。

机の上には、陰陽陣を用いた術陣の描かれた紙。

「あら？ これ・・・」

霊夢は、紙をとり、裏を見たり透かしたりしてみる。しかし、変化なし。

「・・・発動させてみようかな」

力を、霊夢は少し紙に送ってみた。

とたんに陣は光を放ちながら高速回転を始めた。紙は、回っていないが・・・。

声が部屋の中に響いた。

《霊夢さん！ この霧は、うちのお嬢様のやった・・・異変です！ こ

の霧は、本当は赤色で、太陽の光を遮るためのもの……私は訳あって動けませんが、遥以外の方々にも頼んであります！遥は……屋敷側の人間です！お願いします、お嬢様を倒して、この霧を……！」

そして声は途絶えた。

「自動再生の術だったのね……それにしても、面倒なことになったわね……とりあえず魔理沙のところにでも行くか」

そして霊夢はふわりと宙に浮き、霧雨邸へ向かった。

同時刻、霧雨邸。

漆が魔理沙の部屋の掃除をしていると、一枚の真新しい魔法陣の描かれた紙が。

「……自動音声再生の魔法陣……この感じ、零からか……」

「よう。どうした漆？」

「零から、自動再生の紙が送られてきた。どうする？」

「再生するに決まってるぜ。久々に異変の香りがするぜ……」

漆が魔法陣を発動させると、魔法陣は僅かな光を持ってふわりと浮き上がった。

《魔理沙さん！漆！僕と遥のいる屋敷の主を至急、倒してください！霧は異変です！この霧は本当は……》ざざっ、ぶつつ……

「ノイズだとっ！ふざけるなあっ」

半ば怒りを顕あらわにして、魔理沙は叫んだ。

「急ぎだっただんどう？とにかく、霊夢の到着を待とう」

「魔理沙！」

「霊夢、零から連絡が……」

「あんたのどこにも?!」

「ああ、ここ数日続いていた霧は、オレがクビになった屋敷の主の仕業だ」

「……場所は、わかるのよね？」

「ああ。ここから・・・そうだな、神社裏を抜けて湖を越えた先だな」

「・・・遠いわね」

「すごく遠いぜ」

「当然だ、あいつらは他人との接触を忌み嫌うからな」

「へえ・・・」

「・・・オレがいくのは当然として、あと一人援護にだけかついてきてくれないか？」

「そう、ねえ・・・」

「むむ・・・」

T o B e C o n t i n u e d

序章・霧の中の宴／Banquet in misty・（後書き）

いやいや、ご免なさい遊びすぎです。

Stage 1 夢幻夜行絵巻〜Mystic Flyer〜Type M

魔理沙&湊シナリオのst1です。

魔理沙は湊に先に行けといわれて湖まで行ったと言っこと。 大ちゃんとは会ってないっこと。

月の紅い、霧のない夜。

魔理沙の家にて。

「・・・私が行くぜ」

「そうか、じゃあついて来い。俺が案内する」

漆は、魔理沙を先導し、空を飛ぶ。

魔理沙はそれを、箒で追う。

「・・・まず神社裏から回ったほうが無難だな・・・軽く幻想郷の妖気を探ってみたが、神社裏の森まわり、湖の外延、『紅色の境』をそれぞれを囲むように妖怪が張り詰めている。そこで、一つだけ道のように妖気が薄いところがあるんだ」

「・・・思い切り畏だよな・・・？」

「ああ、だが、今のオレ達にはそこを行くしかお前の体力を温存する方法はない。後は、オレが畏を跳ね返す。その間に、お前は一気に屋敷の主人を叩け」

「・・・わかった、任せろ」

「じゃあ、お前は先に行け」

「おう、すぐに追いつけよ」

「わかってるさ。オレは、幻想郷三位のスピード狂だぞ」

「・・・じゃあ、後でなっ！」

「おう！」

「わはー。誰か来たよ？珍しいこともあるものだよね」

「・・・異常に敵が薄いと思ったら、こういうことか・・・」

「あれ。あんたは、たしか三年前に首になった・・・」

「知ってたか。えっと、お前は・・・」

「ルーミアだよ」

「そうそう、メイドの衆に『るみゃちゃん』って親しまれてた妖怪
幼女」

「幼女って言うな!」

「じゃあ何か?ガキ?」

「くそつ、ぶつ飛ばしてわからせてやる!」

ルーミアがスペルカードを取り出し、しかし唱えずにレーザーと
黄色の弾幕を放つ。

「・・・なんでオレが首になったか知ってるか?」

「え、それは・・・弱いからでしょ」

「逆。全くの。オレが首になったのは、強すぎて言うこと聞かない
からだ」

「・・・何それ・・・反則でしょ」

レーザーは魔法陣に吸収され、黄色の弾幕は軽くかわされる。

「破滅の意思・・・宿れ、蹂躞の光!」

ルーミアの放ったレーザーが、くねくねと旋回しつつ高速でルー
ミア自身に迫った。

「なっ、この!」

レーザーで相殺を狙うも、あえなく失敗。

だが、漆の返したレーザーは何かに弾かれた。

「・・・手加減はしないよ?」

「わかってるって、手加減なんてさせない」

ルーミアが腕を右に振りぬけば、漆の左肩に傷が。

「わお、いい感じじゃねえか」

漆の右手のフォールドから、刃が現れる。

「やっぱり携帯型とは違うな・・・じっくり来る。やっぱり腕刀はこ
うでなくちゃな」

ルーミアが少し引き、スペルカードを詠唱する。

「闇符『デイマーケイション』!」

ルーミアの姿が見えなくなった。

と言ってもルーミアがいると思われるところだけ、黒く塗りつぶされているような状態になっているので、一目瞭然だが、そこから、一筋の闇が伸びてきた。

「おーおー、やってくれんじゃねえの」

腕刀で闇を斬る。

「お前の能力は・・・そうだな、闇を操る能力と言ったところか」
「・・・あたり」

「能力が割れたところで、オレのこの剣の説明だな」
「ただの腕剣じゃないの」

「これは一方向からしかきれないから、腕刀だな。これは、何かに対して物理的作用を齎すものは何でも斬れる、と言う能力がある。それがたとえ普通の刀に切れない幽霊や、お前の闇のような実体のないものでもな」

「それがあんたの能力、ってわけじゃなさそうだね」
「ああ、俺の能力はもっと他にあるさ。だが、そこまで教える義理はない」

幾条もの闇が漆に降り注ぐが、それを武神の如し刀捌きで、切り刻む。

「邪魔だ、消えてくれ」

「だめだよ、此処は通すな、って言われてるんだから・・・夜符『ナイトバード』!」

緑と黄色の弾が交差し、美しい・・・のかはわからないがかわすのは容易い、上から見れば鳥の羽を形作る弾幕が作られた。

「邪魔だつての。斬符『サートーンオンフライデー』!」

漆の腕刀に殺傷指向の魔力が宿る。

それが回転を始め、チェーンソーのような刃になる。

「これがあるから、腕剣でなくてもいいんだよな」

ナイトバードの弾幕飛び交う中、ルーミアの懐に突っ込む。

「なっ・・・!?!」

弾き飛ばそうと弾幕を固めて放つが、漆の魔力に弾かれ、地面に叩き落とされる。

漆に高速で切り刻まれ、ルーミアの服はぼろぼろになった。

「・・・勝ちだ。このまま死にたくなければ、負けを認めろ」

「・・・仕方ないね・・・私の負け。降参だよー」

「よろしい。じゃあ、オレは先に行くぞ」

「もっと強いのが先にいるよ？」

「・・・そうか。楽しみだ」

「楽しみなのかー」

「ああ、楽しみさ」

ひゅう、と風を纏い、空を駆る。

その姿に、ルーミアは

「何あいつ・・・」

僅かに、顔を赤らめていた。

「おおよそ・・・というか夏だぜ。何でこんなに寒いんだ？」

「道に迷うは、妖精の所為さ！」

「・・・場違いなのがきたな・・・何か返答を間違えている気がするぜ」

「え、あ、お呼びでない？」

「呼んでないぜ」

「そういうわけにはいかないのがあたいの仕事なのさっ！」

「仕事・・・全く親御さんは何をなさっているんだか」

「あたいは妖精だよ！」

「そうだったな。と言うか寒いのはお前のせいだろ」

「うるさいなあ、あたいの仕切る湖に入ってくるのが悪いんでしょ」

「お前がいるから寒いんだから、お前は・・・『寒い奴』だな」

「なんか・・・意味の取り違いがある気がする・・・」

「お？わかったか。それくらいの知性はあるみたいだな」

「くっそー！あんたなんて利吉栄牛と一緒に氷付けにしてやるー！」

f
i
n

るみゃの「わはー」ってオフィシャルじゃないそうですね。

『楽しみなのかー』は、どうしても「なのかー」がやりたかったので。

魔がさした後悔はしていない。

あと、チルノのせりふがごちゃごちゃなのは、針巫女とミサマリをよくつかうから混ざっちゃって……。

すみませんね……。

どうも。

今回、もうほとんどやつつけと思われても仕方ないですね。

チルノとは戦いません。大ちゃんとは戦います。

結局雑魚いです。

それではまた。

漆が湖についた頃には、既に粗方の雑魚は消えてなくなっていた。

「魔理沙め・・・オレの楽しみの邪魔を・・・」

紅魔館に向かって飛んでいると、

「貴女がチルノちゃんをいじめたのね?!」

「な、何のことだ!」

「しらばつけないで! あなたのその性格から、チルノちゃんをいじめたのはすぐわかるんだから!」

現れたのは、妖精。ただ、少し周りより強い魔力を発しているだけの。

「オレはあんなのを虐めて楽しむ趣味はねえ! 頼むからそんな言いがかりは・・・」

「問答無用!」

「おわわっ!?!」

緑色のクナイ弾を唐突に放って来た。

漆はこれを軽くかわし、次の攻撃に備える。

「な、何のつもりだ!」

「はああっ!」

もう一度緑色のクナイ弾が放たれた。

「これしか出来ねえのか? ハッ、所詮は妖精か!」

弾幕ごっこに突入したと判断すると、とたんに漆は妖精を煽る。

「なんですってええええええええええ!!」

クナイ弾がとたんに濃くなる。

「わっ、と?!」

五層ほどのクナイ弾に多少動揺はしたものの、すばやくこれをおさず。

「斬華『シャープマジック』!」

腕刀が赤い光を帯び、それが糸状に解けて漆の周囲をくるくると

踊りだした。

「はぁぁぁあつー!!」

妖精が漆を囲むように米弾を放つ。

囲んだ上でさらに追撃式の弾幕が漆に飛ぶ。

「おお、中々。でも、甘いつ!」

妖精に急接近し、軽く腕刀を振る。

「この程度!」

大きく後退し、再びクナイ弾を放つ。

「この程度・・・どうしたって?」

赤い糸状の光が、妖精に絡みつく。

「な、なあ?!」

それが次第に回転を始め、妖精を殺さない程度に刻んだ。

「・・・勝負あった、この俺の勝ち」

「く・・・こんなに、私の服をぼろぼろにして、許さないから!」

はだけかけた妖精が、なにやら負け惜しみを言っている。

「そうか。じゃあ、今度あった時、完全にその上着をびりびりにしてやる」

「この変態!」

「勘違い乙」

「魔理沙!」

「・・・あ、漆」

「つたく、お前は早いつての!」

「ふん、お前が遅いだけだろ?」

「まあ、確かにそうだが。それより、ここからはおそらく敵は数段上・・・俺についてきたほうがいいと思うが」

「そうか? じゃあ、まあ、そうさせてもらっぜ」

真紅の廊下、真紅の床、屋根。

全てが紅く染まるその中に、まるで溶け込むように彼女は座ってい

た。

「お嬢様、侵攻が思ったより急です。如何なさいましょう」

銀の短髪にヘッドドレス。エプロンスカートの裏に無数のナイフ。時を操る従者は、運命を操る主に、事態の報告をしに現れた。

「そうねえ・・・どうせ相手は、あの巫女の子供か、漆の居候先の魔術師。大した相手じゃないと思うし、美鈴が潰してくれるでしょう」

「そうでしょうか・・・」

「そう、信じておきなさい」

「は。・・・ですが、もし『門』と『図書館』が破られるようなら、私が動きます」

「大丈夫よ。あの子たちなら、確実にここまで届かせるような真似は、しない筈」

o B e C o n t i n u e d . . .

T

s t a g e 2 湖上の氷精 Water Magus ・ Type: Mari

眠い・・・寝たのは4時です・・・
ちよつと寝てきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5643e/>

東方紅魔郷～the Embodiment of Scarlet Devil.を弄ってみた

2010年10月10日19時34分発行